

報 道 各 位

新潟市教育委員会事務局学校支援課

令和 8 年度全国学力・学習状況調査新潟市結果について

標題の件につきまして、下記のとおり令和 8 年度の結果を公表いたします。

記

新潟市の結果の概要

- 1 平均正答率・IRT スコア
- 2 新潟市の教育に係る分析
 - (1) 教科の本質を捉えた授業づくりについて（算数の調査結果から）
 - (2) 生徒指導と児童生徒の心理的安全性の状況
 - (3) 特別支援教育の視点に立った指導の工夫の取組状況

【問い合わせ先】

新潟市教育委員会事務局
学校支援課長 内藤 浩悟
TEL 025 - 226 - 3254

令和8年度 全国学力・学習状況調査 新潟市の状況（速報）

この調査は令和8年4月に新潟市内の全小学校の6年生と中学校及び高志中等教育学校前期課程の3年生を対象に、国語、算数・数学、英語についての教科調査と、児童生徒への質問調査が行われた。

新潟市では、現時点で提供された本市の児童生徒の正答率・IRTスコア、質問調査への回答状況を活用しながら、本市の実態を把握するとともに、国から8月以降に提供される資料を基に本市の取組の成果と課題を総合的に分析、評価していく。これらを通して、児童生徒の学習改善や学習意欲の向上につなげていくことを目指す。

◆結果公表は8月3日（月）17時。新聞報道に関しては、8月4日（火）朝刊で解禁。

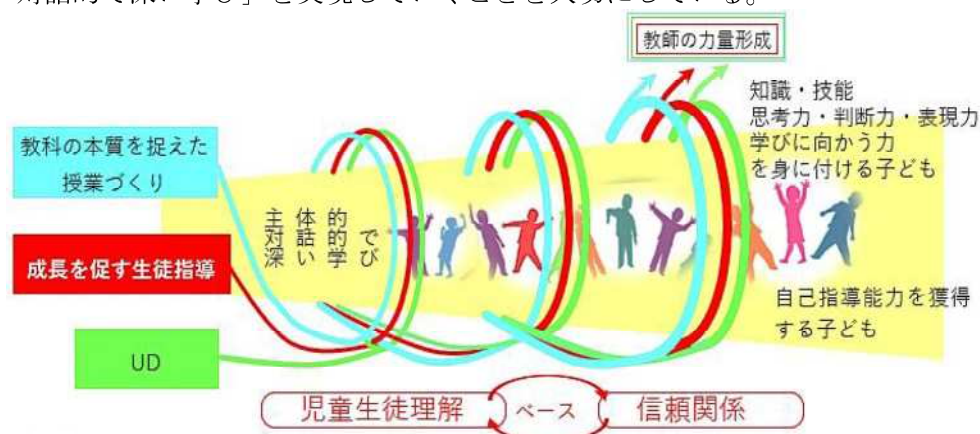
1 教科調査の平均正答率・IRTスコア

学年	教 科	新潟市 平均正答率	全国や県の平均正答率 (県：新潟市を含む)	
小学 校 6 年	国語	6 0	全国（公立）	6 0 . 9
			県	5 8
	算数	5 6	全国（公立）	5 6 . 4
			県	5 5
中学 校 3 年	国語	6 4	全国（公立）	6 3 . 9
			県	6 2
	数学	5 6	全国（公立）	5 7 . 0
			県	5 4
	中学校英語はCBT（オンライン）で実施されました。問題は個人ごとに異なるため、IRT（問題の難易度を考慮して受験者の能力を評価する理論のこと）が採用されています。			
	英語	4 9 3	全国（公立）	4 9 9
			県	4 8 2

※中学校英語は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の3技能についての集計値

2 新潟市の教育に係る分析

新潟市は、「多様性」を前提とし、全ての子どもたちの「自分らしさ」が発揮され、「可能性を引き出す」教育を目指している。そのために、下図のように授業づくりや子どもたちとのかかわりに、生徒指導やユニバーサルデザインの視点を内在化させ、児童生徒理解に基づく信頼関係を構築していくとともに「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことを大切にしている。



この視点で、本年度の児童生徒質問調査及び学校質問調査を分析し、取組の現在地を考えた。

(1) 教科の本質を捉えた授業づくりについて（小学校算数の調査結果から）

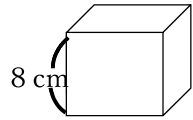
本市の特徴をよく示す、次の問題を例に挙げる。

1cm³の立方体が36個あります。36個すべてを使って、高さが4cmの直方体を1つ作りました。その直方体の体積は何cm³ですか。答えを書きましょう。

〔正答〕36 cm³

1辺が8cmの立方体の体積が何cm³かを求める式を書きましょう。ただし、計算の答えを書く必要はありません。

〔正答〕8 × 8 × 8



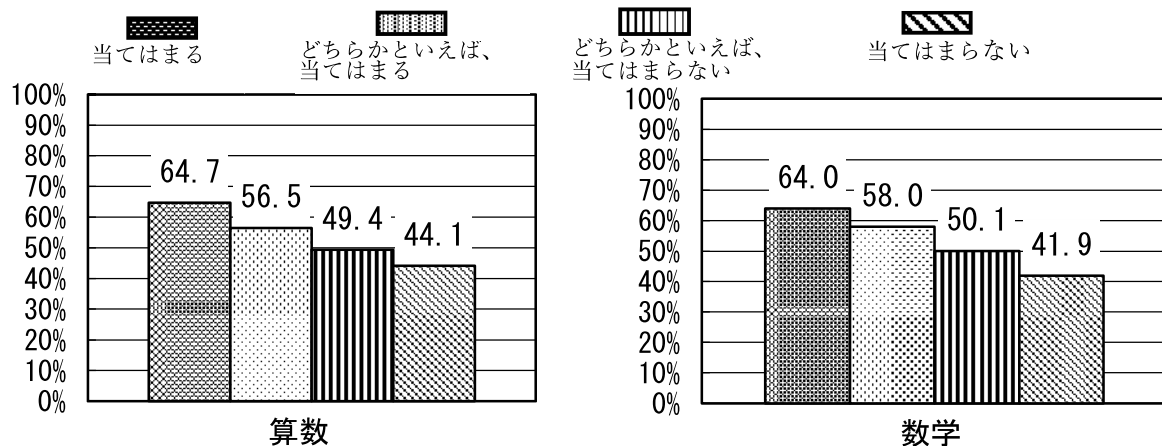
正答率：43.2%

正答率：72.9%

この結果から、立方体の体積を求める公式は覚えていても、体積の意味については半数以上が理解できていない実態があることが分かった。面積の考え方と同様に体積も、1cm³のいくつ分として表すことができることや、立体は形が違っても体積が同じであることを理解できていないことが分かる。

さらに、下の質問への回答結果から、今後の改善点を探ることができる。

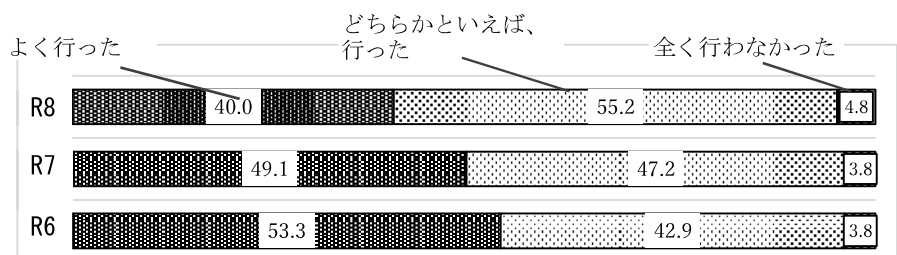
児童生徒質問 66「算数/数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていましたか」への回答と正答率とのクロス集計（縦軸は正答率）



授業で、「どのように考えたのかについて説明する活動を行っている」児童生徒ほど、算数・数学の正答率が高いことが分かる。

学校質問 51「算数・数学の授業で、問題の答えを求めさせるだけでなく、どのように考え、その答えになったのかなどについて、根拠を明確にして児童生徒に筋道を立てて説明させるような授業を行いましたか」への回答の経年変化（小学校）

直近3年間で、本質問への「よく行った」への回答の割合が減少している。この課題に対して、改善に取り組むことが必要である。

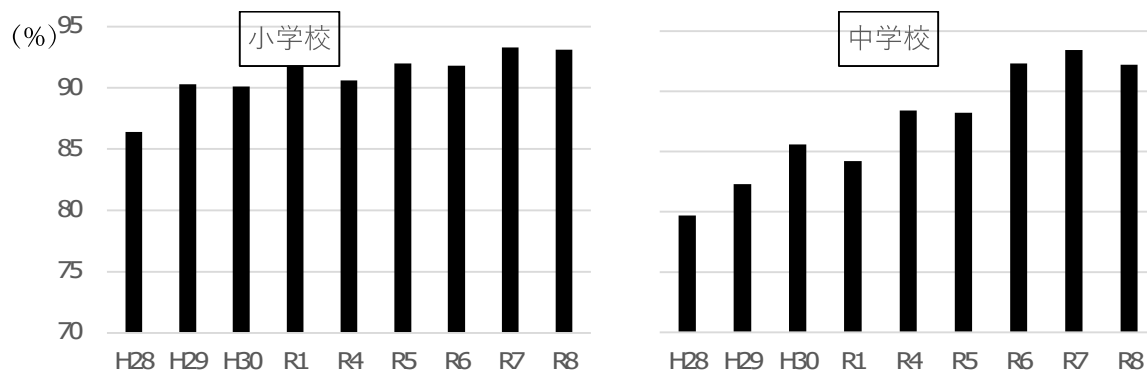


これらの結果から、単に、正しい答えを求める、正しく計算する、といった正解だけをゴールとするのではなく、なぜそうなるのか、どのように考えればいいのかを大切にする授業へと改善する必要がある。

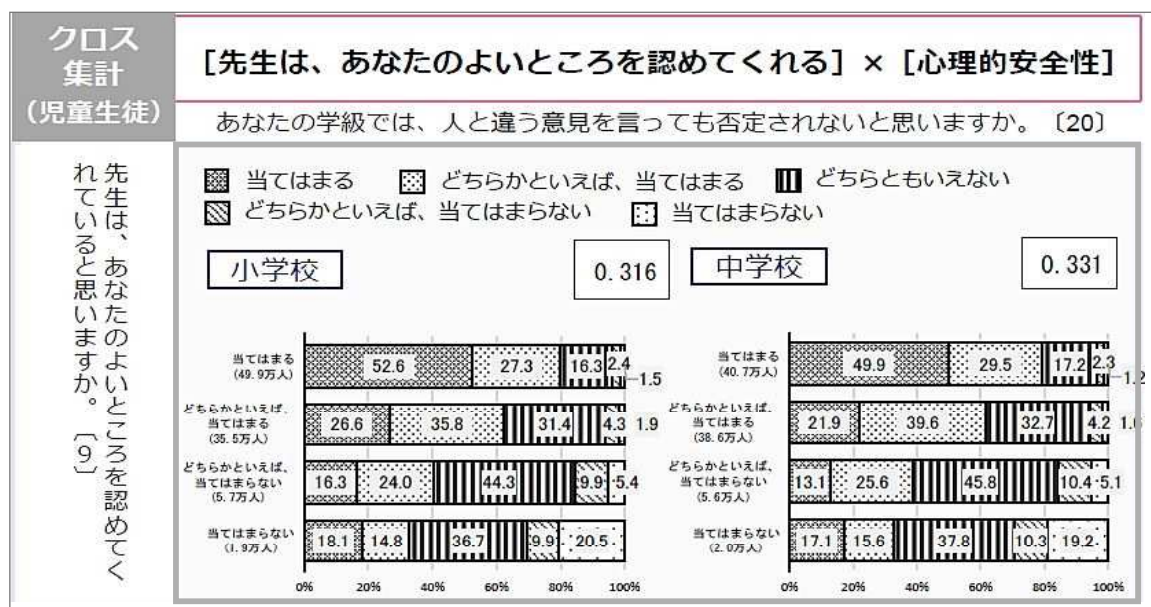
(2) 生徒指導と児童生徒の心理的安全性の状況

児童生徒質問 9「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」への回答状況

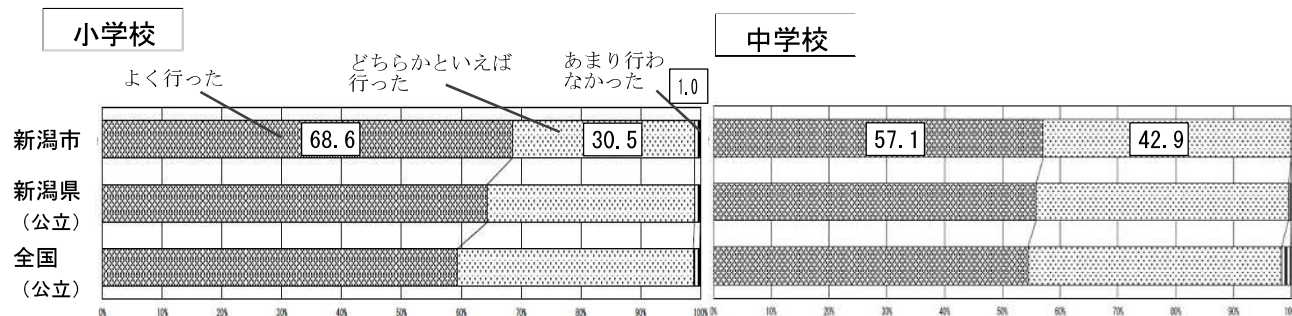
【経年変化】 肯定的回答（当てはまる/どちらかといえば、当てはまる）の割合の合算値



経年変化から、本市では「先生がよいところを認めてくれている」と回答している児童生徒の割合が増えている。また、下のクロス集計は、教職員が児童生徒のよいところを見付け、認めるほど児童生徒の学級における心理的安全性が担保されることを表したデータである。（令和8年度全国学力・学習状況調査事務連絡会資料より）



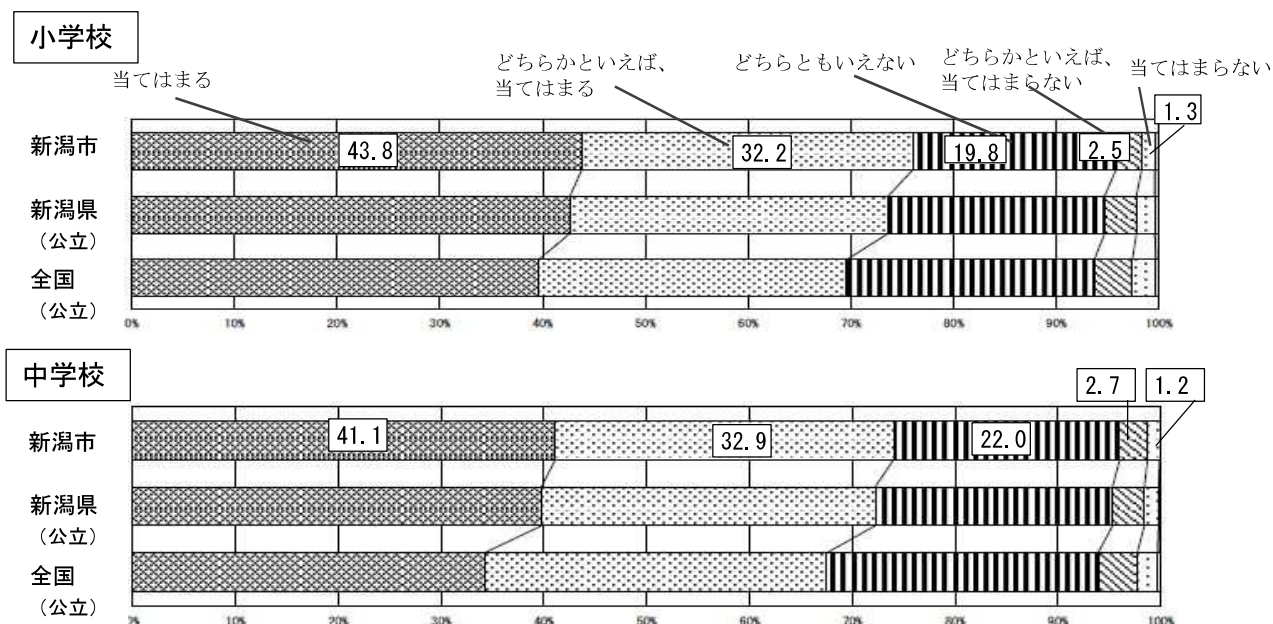
学校質問 11「学校生活の中で、児童一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組を行いましたか」への回答状況



これらの結果から、今後も児童生徒と教職員との信頼関係の構築を基にした発達支持的生徒指導に力を入れ、どの子どもも安心して自分らしさを表出できる心理的安全性を重要視していく。そのために、これまでも本市が大切にしてきた「授業と生徒指導の一体化」を一層進めていく。

(3) 多様性を前提とした指導の工夫の取組状況

児童生徒質問 20「あなたの学校では、人と違う意見を言っても否定されないと思う」への回答状況

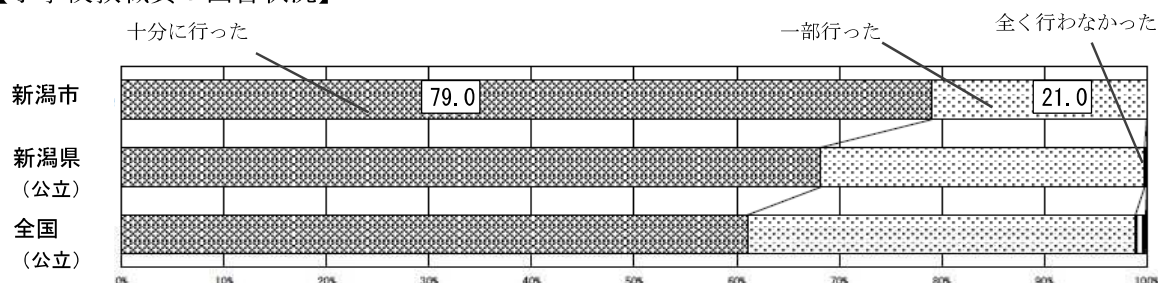


学校質問 72 (小) 80 (中)「前年度までに、発達障害を含む障害のある児童も含めた、多様な児童が通常の学級に在籍していることを前提に、学級全体での指導の工夫を行いましたか」への回答状況

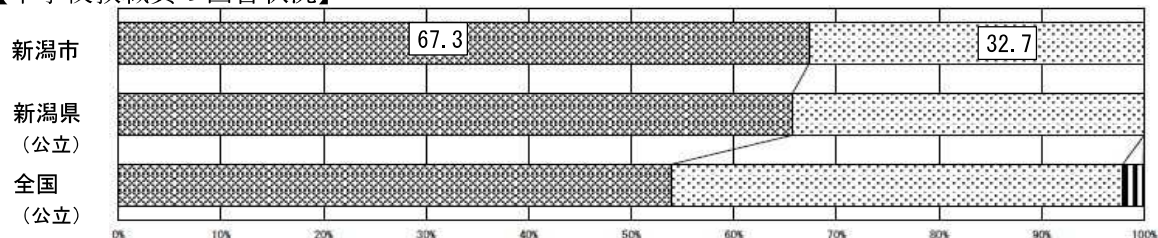
(例)・板書を見やすい文字の大きさや行間で行う

- ・実物を提示したり、掲示物を指し示したりしながら説明する
- ・色分け・写真画像やイラストの活用など掲示物を工夫する
- ・授業中のルールの明確化や構造化を図る 等

【小学校教職員の回答状況】



【中学校教職員の回答状況】



教職員が、障がいのある児童生徒も含めた多様な児童生徒を前提に学級全体での指導の工夫を行うことが、児童生徒が周囲の考えを尊重しながら、協働的に学ぶ環境づくりに役立っている可能性がある。

これらの結果から今後さらに、児童生徒の質問 20 への肯定的評価の割合が高まり、「多様性」を前提とし、全ての子どもたちの「自分らしさ」が発揮されるよう、ユニバーサルデザインの視点を内在化させた授業づくりを大切にしていこう。